



「看護師としての財産」

受賞者：齋藤 芳理子 さん

看護師5年目の夏。私は回復期病棟で、一人の患者Sさんと出会った。

心原性脳梗塞で倒れ、言葉も体もままならず、ベッド上で奇声を上げる日々。リハビリにも消極的で、心を閉ざしていた。しかし、言語聴覚士が介入するリハビリの時間だけは違ってSさんには強い意思があった。

「口から、食べたい」

失語があるため、ジュースチャードが何度も口を指さして訴える。実は、食べ歩きが趣味だったと伺った。

Sさんは、毎週同居の息子さんとおいしいものを探してよく出かけていたのだ。

「Sにとって、口から食べることは生きる喜びそのものだったのだと思う」と息子さんは寂しそうに、私に教えてくれた。私も息子さんも可能なら口から食べてほしいと願った。

しかし、嚥下機能は著しく低下し、とろみをつけたミキサー食を、ベッドを30度に起こしてようやく飲み込める状態。

それでも「椅子に座って食べたい」とSさんは、ベッドから起き上がり訴える。それが、Sさんの願いだ。

「無理です」と言うのは容易だった。

しかし、患者本人の意思を尊重することは、看護の根幹である。Sさんが諦めない以上、私も諦めるわけにはいかなかった。

ご本人、ご家族と繰り返し対話を重ね、多職種で情報を共有し、安全性と可能性を検討しながら取り組んだ。

まずは誤嚥リスクが少なく、咀嚼を必要としない食品を選択した。

卵ボーロ、チョコレート、アイスクリーム。姿勢や一口量を調整し、試行錯誤を重ねるうちに、少しずつ飲み込める事が多くなった。

すると、Sさんの表情に笑顔が戻り、病室の雰囲気も明るくなっていった。

やがて段階的にベッドの角度を上げ、最終的には車椅子での食事が実現した。

自らスプーンを持ち、口に運び、嚥下できた瞬間、私は胸が熱くなった。

さらに固形物も少しずつ食べられるようになり「もう一度、食べる喜びを取り戻せた」と実感されたその姿は、看護師としての大きな財産となった。